

「令和の時代の滋賀の高専」設置に向けた懇話会（第4回）

議事録（要旨）

日時：令和3年11月24日（水）15：00～17：00

開催方式：Zoomビデオウェビナーによるオンライン開催

● 主催者挨拶 滋賀県総合企画部長

- ・ 本懇話会は6月にスタートし、今回で4回目、最終回となる。これまで貴重なご意見をいただいたことについて改めて感謝申し上げたい。
- ・ 本日は、これまでの検討内容を踏まえ、新しい高専の全体像を県からお示したいと考えている。今後はお示しする全体像をベースに内容をブラッシュアップしていく予定である。

● 八尾座長挨拶

- ・ 6月の第1回懇話会では、高専の特徴や高専に対する期待を踏まえ、滋賀の高専で育成すべき人物像についてご意見をいただいた。これからの技術発展とこれまでの技術維持のための人材育成が一層重要になることや、そうした状況下で若い力を活用することが重要であるという認識を共有した。さらに、滋賀県の立地や伝統が高専設立に非常に適しているということも確認した。
- ・ 8月の第2回懇話会では、産業動向調査や各種アンケートの結果を参考にしながら、どのような分野の技術者育成が望まれるのかについて意見交換を行った。そこで情報技術が技術の基盤として必要であること、そしてその基盤の上に、それぞれの専門分野を持つ、二刀流・三刀流の技術者を育てていくという新しい方向性が導出された。それに加え、実際に手を動かして、実地に強く、地域や産業と連携できる技術者の育成を目指した教育の重要性も示された。高専と産業界との連携につきましても種々ご検討いただいた。
- ・ 10月の第3回懇話会では、学びの分野として、情報技術の基盤の上に、情報、機械、電気・電子、そして建設の専門分野を立ち上げるということが共通認識となった。また、高専の設置規模については、1学年あたり120人程度が妥当であるという認識を共有した。設置場所については、環境並びに災害時の安全性の重要性、アクセスの良さ、交通の利便性についてもご指摘いただいた。さらに起業に挑戦する若者への期待、専門コース以外の幅広い勉学、基礎となる学習の重要性、そこから発展できる学習等様々なご意見をいただいた。

またデザイン力の重要性についてもご指摘をいただいたが、これはリベラルアーツに通ずるものがあると思う。技術は非常に人間的であり、個々の機械には作った人の個性

が出てくるものである。技術において人間力というものが非常に重要であると、その教育の必要性につきまして認識を新たにしたところである。新しい考え方を取り入れながら、高専を新設するにあたっての課題が示されたと考える。

- ・ 今回の第4回懇話会では、これまでの内容を踏まえ、より具体的・発展的に、議論を深めていきたいと考える。

- **資料2「第4回懇話会資料」説明 滋賀県 総合企画部 企画調整課長**

- ・ 滋賀県より、資料2「第4回懇話会資料」に沿って資料の説明を行った。

<意見交換>

(施設・設備について)

- **皇子山中学校 脇様**

- ・ 滋賀県の小中学校では、コミュニティ・スクールとして、地域の方と学校運営について協議する会議を年5回程度実施している。しかしながら、地域の方が自由に利用できるオープンスペースのような施設は小・中学校にはない。学校が地域の方と一緒に学校の様子を見ながら話をしたり、地域や企業、学生がフランクな会議をしたりするために自由に利用できるような施設があると非常にありがたいと考える。こうした施設の存在自体が、高専の教育活動や教育理念が常に地域社会に開いているということを地域社会に対して示すきっかけの一つになると考える。
- ・ 例えば近江八幡市にある商業施設「ラ コリーナ」では、周辺の山などが借景のようになり、一体化した美観が形成されている。豊かな自然や史跡などを活かし、地域と一体化したような施設になると、他の高専にはない面白い特徴になるのではないかと考える。

- **さくらインターネット 油井様**

- ・ 前回までの内容の繰り返しになるが、設備はあまり贅沢過ぎない程度で、学生がハングリーさを感じられる環境が望ましいと考える。一方であまりにも質素過ぎると学生がストレスを感じてしまう可能性があり、入学希望者にとって必ずしも魅力的な環境とはならないことから、ハングリーさが生まれる環境のバランスは難しい。例えば、ベンチャーキャピタルの取り組み等を例にとって、ハングリーさを伴う環境からスタートすることの意義を学生に理解してもらうことなどは有用ではないかと考える。

- **ナカサク 中作様**

- ・ 設備については、メーカースペースやコワーキングスペースなど、地域とのつながりが生まれ、地域の方が集まることができるスペースができるとよいと考える。将来的には地域の有志が有料で高専の設備を使うことができるようになるるとよいと考える。

(設置場所について)

● 村田製作所 小杉様

- ・ 滋賀県内には京都や大阪への通勤者が多く存在することから、高専はその逆を狙って、これらの地域から学生を呼び込めるとよい。それを踏まえると、設置場所としては琵琶湖線沿線かつ新快速の停車駅であることなど、利便性にこだわるのが重要であると考ええる。利便性を優先し設置場所を選ぶことで、将来的に学生募集においても有利に進められることができるのではないかと考える。設置場所の選定は、学校経営としても十分成り立つという点を踏まえて行われることが重要である。

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 県庁所在地は発展しているので、設置場所の候補から外すことが望ましいのではないかと考える。
- ・ 高専を設置する場所は、その場所を擁する自治体自身が、継続的に高専を盛り立てていく強い意欲を持っていることが望ましい。例えば京都府の舞鶴高専と舞鶴市は、社会インフラのメンテナンスや地域イベントへの参画等を通じて非常に良好な関係を築いている。
- ・ 高専では地域課題に取り組んでいる学生が多くいるが、学校が設置されている場所によって、学生が取り組んでいるテーマの傾向に特色がある。例えば首都圏の高専では高齢化社会の課題、地方の高専では地域に根差した農林水産業の課題に解決する学生が多いことなどが挙げられる。滋賀県は湖をはじめ、豊かな自然を有するので、これらを活用してベストポジションを得られるとよいと考える。

● 三東工業社 尾本様

- ・ JR琵琶湖線沿線であれば交通の便は非常によい。しかし、寮生活を前提に学生生活を考えると、交通の便がよいと学生があまり寮に戻ってこないというケースも出てくるように思うので、少し不便な場所にある方がよい可能性もあるのではないかと考える。
- ・ 一方で学生を取り込むという点では、通学の利便性等を踏まえるとJR琵琶湖線沿線の方がよいと考えられることから、非常に難しい選択である。

● ナカサク 中作様

- ・ 設置場所の選定において、学生寮は論点の1つになる。利便性の良さをとるか、少し田舎になっても寮を用意することで、学生を取り込めるような環境を用意するのかということになるが、収益性を踏まえると、後者は現実的に難しいのではないかと感じる。バランスを考えることが重要である。

(学校の設立・運営にかかるコストや学校経営のあり方について)

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 産業界と連携し、例えばクラウドファンディングなどの仕組みを活用することも可能ではないかと考える。高専が提供できる技術をベースに、企業と共同で技術開発をするというような形で資金調達ができればよい。
- ・ 学校経営の観点では、小中高がコミュニティ・スクール化を進める中で実施している学校運営協議会のようなものを設立当初より高専の中にも立ち上げることが望ましい。地域・事業者の願いを踏まえた学校経営や適切な教育活動が行われているかを評価し、学校経営に参加できるような仕組みを作ることができるとよいと考える。
- ・ 小中の学校運営協議会は、民生児童委員など地域で生徒指導に関わる役割を担っている方や学識経験者、保護者代表等で構成されているが、高専で同様の取り組みをする場合は産業界や地域の諸団体の代表に参画していただくことが望ましいと考える。

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 徳島の神山まるごと高専では、クラウドファンディングとふるさと納税の仕組みを活用し、当初の予定であった17億円を優にオーバーする24億円程度の資金調達に成功した。ふるさと納税のような既存の仕組みをうまく活用して資金調達を行うことも重要である。
- ・ 滋賀県は近江商人発祥の地であるので、ゆかりのある企業をはじめ、経済界に資金協力を仰ぐということも一案である。

● さくらインターネット 油井様

- ・ 神山まるごと高専については、さくらインターネットもふるさと納税制度を活用して資金提供を行っている。企業版ふるさと納税の仕組みを活用すれば、企業としてもメリットを受けながら資金を提供することができる。制度の活用にあたっては諸般の条件やルールをクリアする必要があると想定されるが、神山高専の前例も踏まえてうまく活用できるとよい。

● 村田製作所 小杉様

- ・ 学校の安定的な経営のためには、大きな収入源となる入学金や授業料を必ず確保することが重要であると考えます。加えて、魅力ある学生に入学してもらえるような工夫を行うことが重要である。そのような学生は、就職を含め多様なキャリアを歩む可能性が高く、将来的にはその学生自体がPR媒体となり、志願者増に寄与する可能性がある。人口減の中での学校経営は非常に厳しい。設置場所も含め、いかにして学生を呼び込むかという点は非常に重要である。
- ・ 新しい高専を作ることになるので、斬新なデザインの建物や食堂など運営面も含めて若者視点で検討する必要がある。例えば、大学の建築学部の学生を対象として、デザインコンペを行うと、学生のモチベーション向上につながり、建築コストの軽減にも寄与す

る可能性もあるのではないかと考える。このように、コストを抑えながら、「魅力ある滋賀高専」作りも一案である。

- ・ 「企業が頼ることができる高専」になることができれば、企業からの共同研究の実施やコンサルティング業務の発注等を通じて金銭的な支援も可能であると考え。そのためには、その部分に興味・関心を有している教授陣をいかに揃えるかということも重要になると考える。

(多様な学びの重要性について)

● 三東工業社 尾本様

- ・ 土木・建設の分野では、専門性に加え、コミュニケーション能力も非常に重要である。現場ではベトナムや中国の出身者が入社するケースもある。グローバル化の進む中では、日本人側もアジアの国の言語をはじめ、外国語を学習することが多少なりとも必要になるのではないかと感じている。
- ・ 建設業界では、継続学習制度が企業に課せられており、社会人の私たちも継続的に勉強する必要がある。日々技術は進化するので、企業側もその進化に対応する必要がある。しかしながら、企業の中にいると、仕事をこなすことが優先されてしまい、学ぶ時間が十分に取れない。よって、高専が地元企業の身近にあり、企業の人材も、新しい技術を高専の先生・生徒と一緒に学ぶことができると、交流も促進され非常によいと考える。企業側からすると、高専に受講料を払ってでも学びたいという側面もあるので、運営の面でも役立てるのではないかと考える。

● ナカサク 中作様

- ・ ダイバーシティの観点を踏まえて学校について検討すると、学生の多様性やコミュニケーション能力の向上につながると考える。障がいの有無やジェンダーの違い、社会人と学生の違いなど様々なボーダーを越えるような学校づくりが必要である。
- ・ ボーダーレスの観点から考えると、国や地域も関係ない。オンラインで学ぶことができる環境を整えることも一案である。

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 教育現場でも一定の教職経験の後、大学院へ研修派遣をする制度があるが、今後は事業所も同様のシステムになると考えられる。生涯学習社会が進展し、リカレント教育が一層重要になる中では、一生学びながら働き続けるという北欧型の社会を目指していくことになる。一般の方が、例えば半年や1年の短期だけでも、あるいは科目等履修のような形で数講座だけでも受講できるようなシステムがあると、対象者が非常に拡大するのではないかと考える。

- **日本経済新聞社 田中様**

- ・ 学び直しという観点で高専を頼りにしている地域の企業は多い。

(教員について)

- **日本経済新聞社 田中様**

- ・ 高専には、実業界での勤務経験を経て、さらには働きながら博士号を取得した後に高専の教員になったような経歴を有する先生がいる。こうした先生は、実業界での勤務経験から企業の悩みなどをよく理解していることもあり、地域連携に非常に積極的な傾向がある。実業界での経験を有する教員をより積極的に採用することが望ましいと考える。
- ・ 高専の先生が地域の企業に出向いて現場を見てくるということも非常に重要である。例えば、三菱重工の名古屋工場では、高専の先生を一週間程度受け入れて、企業の取り組みを知ってもらい、教育の場で活用してもらおうという取り組みを行っている。

- **皇子山中学校 脇様**

- ・ 現在は教員養成系の大学でも教職大学院制度という仕組みに変わっており、小中高での教務経験のある人が大学で学生に指導をしている。高専も同様に、企業での勤務経験、企業の技術開発の経験を有している方々をぜひ教授陣として迎えてほしい。理論に取り組んできた方と現場で取り組んできた方が一緒に働いているという環境こそが、目指すべき姿ではないかと考える。

(地域連携について)

- **村田製作所 小杉様**

- ・ 学校と企業の連携は他の高専でも既に取り組んでいるが、これから、運用面などで滋賀高専の特徴が出てくると考える。企業からすると、企業課題の解決において高専の先生に協力してもらいたい。企業も高専も発展し、学生もメリットが受けられるような良いスパイラルができることを期待したい。

- **ナカサク 中作様**

- ・ 地方には各地方の課題があるのと同様、企業にもそれぞれの企業に特有の課題がある。こうした課題を高専の学生と一緒に解決するような取り組みができれば、高専の学生の学びにも役に立つのではないかと考える。

- **八尾座長**

- ・ 多くの高専では、企業との組織化を実現している。例えば、「産業技術支援団体」のような形で高専の応援団のような支援組織を企業に作ってもらい、支援組織を通じて企業と密接に連携している。学生の教育やインターンシップといったものは学校だけでは提供

できないので、ある意味、企業が参加せざるを得ないような形で支援組織に参画してもらうことが望ましい。支援組織が基金を持って、学生の留学などの費用を援助することも考えられる。

- ・ こうした組織化のノウハウは既存の高専において蓄積していることから、うまく活用すれば十分な協力体制を構築することが可能ではないかと考える。

● さくらインターネット 油井様

- ・ 地域連携は非常に重要であり、必ずコミュニティマネージャーのような立場の担当者と一緒に取り組むことができると良い。一方でリスクとして考える必要がある点として、地域連携に取り組むことで、企業と学校・学生との間のバランスが崩れる可能性が挙げられる。実際にある地域で起きたことであるが、結果を出すまでの数年は、これまでその地域にいる方の発言力が大きくなりがちであり、外から来た人や学生が委縮してしまった。こうしたことが起きなければ、事業のスピードも2、3倍変わったのではないかと感じている。地域の方々や地場企業の方々に配慮しながらも、教員や運営に携わる方々が、うまくバランスを取り、事業が十分にスケールする環境を整えることが必要であると考えられる。地域連携しつつも、地域に縛られず、あえて気にしない鈍感さも必要である。客観的に物事をとらえて判断できる方が近くにいると良い。

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 企業の都合だけでなく、学生がどのように考えるかということを十分に踏まえて検討を進める必要がある。例えば、YKKでは、地元の高専の学生を対象にして、黒部の事業所において転勤のない条件の採用を行っている。これは、親元を離れたくないという学生のニーズを反映したものであるが、入社後10年程度経過し、キャリアアップを希望する人に対しては、社内試験などを経て、大卒・院卒と同様の人事ローテーションに入る機会もあるというものである。学生が安心して地元で居続けられる仕組みは企業が主導して作ることが望ましいのではないかと考える。
- ・ 高専の設備や技術に期待をされている方が多いが、設備はそれほど最新のものではないことが多い。民間の方が設備投資をしっかりと行っているため、いいものがたくさんある。
- ・ 高専の学生の本当に素晴らしいところは、限られた予算の中で様々なアイデアを見出すところである。若くて柔らかい頭の中で様々なアイデアが出てくることが本当に面白いと感じている。

● 八尾座長

- ・ 地元企業との連携では、高専と様々な共同研究を行う、あるいは企業にはない装置を高専で使わせてもらうというような連携の方法も考えられる。施設や建物などの共同利用が可能になれば、高専と企業のいろいろな協力体制が出てくると考える。

● **ナカサク 中作様**

- ・ 高専が持っている設備を地域の企業が使うことができるということは、企業にとって非常にメリットがあると考える。

● **三東工業社 尾本様**

- ・ 企業としては、現場で使うような測量器具や3D CADが高専にあるとよいと考える。これらは企業でも当たり前に使われるものであるが、独学で学ぶと非常に時間がかかる。こうした設備があれば、設備自体を高専で借りたり、関連する技術や知識を高専で教えてもらえたり、また、学生と一緒に図面を書いたり、建設であればドローンを飛ばして写真を撮ったり、測量したりということもできる。さらに、企業がそれに見合った対価を支払えば、高専にとってもメリットが生まれ、Win-Winの関係になってよいと考える。
- ・ 土木では、琵琶湖に関する工事やヨシ帯の保全、水質の改善などといった勉強ができれば、滋賀県独自の内容になるのではないかと考える。

● **皇子山中学校 脇様**

- ・ 滋賀県では義務教育で環境教育に継続的に取り組んできたことから、滋賀県民の約4割は、小学生の時に、琵琶湖に浮かぶ「うみのこ」に乗って、環境学習を体験している。このように滋賀県は環境を大事にしてきた県であるので、高専でも「近江を知る」というベーシックな学習として環境学習を位置づけられるとよい。これまで人の力で行ってきた環境保全を技術革新で補うことは可能であると考えるので、技術とコラボレーションして新しいものが生まれることを期待したい。

(学生起業について)

● **さくらインターネット 油井様**

- ・ 起業の低年齢化が進み、起業は早ければ早いほど良いというトレンドがある。エンジニアの取り合いになっているので、勢いや行動力だけではなく、何か技術に強みを持っていることは若い世代の起業において大きなアドバンテージになる。起業家本人がエンジニアとしてコードを書かなかつたとしても、エンジニアリングを理解した上でプロダクトを作ることができる、エンジニアとの会話もスムーズにできることから、プロダクトに手触り感が出る。
- ・ 高専出身の起業家が増えると、日本の国力の向上に寄与するのではないかと考える。これからの時代、技術力だけでは不十分である。「変化し続ける」ということが変わらない人材、ソフトウェア的な人材であることが非常に重要であると考え。よって、高専を作る際は、アップデート前提のソフトウェア的な人材であること、変化し続けることが重要であることを繰り返し伝えてほしい。それさえあれば技術力の高低に関わらず、行

動力が伴えば何でもできる。変化しないと成長率が低くなる。

- ・ 技術も環境も非常に重要であるが、変化し続けている人を、地域や外部から定期的にゲストとして招くことも有効であると考え。その際は、上場しているだけでなく、肩書や社名、知名度だけでなく、上場後も攻め続けている、変化し続けている人を選ぶことが重要である。仮に上場していなかったとしても変化し続けている人をゲストとして招くことができるとそれがそのまま滋賀高専の強みになり、学生も刺激や感動を得ることにつながると考える。この見極めができる人材（コミュニティマネージャー？PM？）がいるか否か、がとても重要である。
- ・ 学生起業の促進のためには、大きな資金援助が必要である。一般的には概ね株式と交換で自己資本を調達することになると考えるが、株を取られるのは起業家にとってあまり好ましくない。寄附のような形で資金提供ができるとよいが、現実的には難しい。
- ・ 実際にリアルタイムで投資をしている方々、ベンチャーキャピタルやエンジェル投資家（および先輩起業家）と月に1回以上接点を作る機会を持ち続けることが重要である。オンラインでもオフラインでもよいので、そうした方と当たり前のように接点を持てる環境や仕組みを、高専が学生に提供できることが望ましい。
- ・ 高専では高専出身の起業家だけを呼びすぎるという傾向がある。高専出身者は協力を仰ぎやすく、重要であるが、高専出身者だけに閉じてしまうと世界が狭くなる。高専出身者に限らず面白い方を「テレフォンショッキング」のような数珠繋ぎに招くことができるとよいと考える。
- ・ 理想としては起業家が自然発生的に生まれるという状況がベストであると考え。インターネット社会なので、情報がないということは概ねないと思うが、例えば高専で、特定の技術やものづくりだけに興味がある人は、いい意味でも視野が狭くなりがちで、他に目を向けない。高専の使命の一つとして、そういう人たちに無理やりにも新しい選択肢を与えて、起業に繋がるような接点を提供すると、視野が広がり、技術力が高い人が起業するという可能性が出る。
- ・ 自然発生的に起業家が生まれることが理想であるが、起業を無理やりさせるのではなく、選択肢として「起業もあるよ」ということを促すような仕組みはあってもよいのではないかと考える。
- ・ また起業家が生まれたとしても、最初は興味がない人は距離を置いてしまうと考えられる。2、3年後に結果が出てきたら、フォロワーも出てくると思うが、時間をもったいない。自然発生的に出てきたロールモデルが学生の近くにいることが理想であるが、ロールモデル化するためには3年から7年は必要である。1、2人が周囲から浮かないようにするために、ロールモデルを身近に感じる仕組みがあることが重要であると考え。

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 既に色々な高専の学生が起業をしているが、100万円程度の資金でスタートすることが多

い。新しい資金が入ってくると揺さぶられてしまう可能性が高いことから、学生時代は学業を優先させ、それ以上資金調達をしない程度にする方がよいと感じる。

- ・ 授業の中で財務やエクイティ、バランスシートの読み方や社長の役割というような内容をしっかりと勉強させないといけないという考え方と、高専の中で、そこまでビジネスに踏み込んでよいのかという考え方がある。解はないと思うが、学校でうまく落としどころを探してもらえるとよい。
- ・ 高専では自然発生的に起業家が生まれていると感じている。学校が何か教育をするというよりか、突然変異の学生が出るのを待つというような形がよいのではないかと考える。

(学生のグローバルな学び)

● 三東工業社 尾本様

- ・ グローバル化が進展する中で、色々な国の方と接点を持つことがあるため、語学は重要である。正社員として日本の企業に入社される外国人は、ある程度日本語を勉強された上で来日している人が多く、ゆっくり話せば概ね理解してもらえることが多い。一方で、現場に入られる外国人の中には、日本語がわからない方もいる。受け入れ側も、相手の言語をある程度勉強する必要があるように感じる。

● ナカサク 中作様

- ・ 海外で設備の据え付けや立ち上げを行う際には語学が必要になることもある。英語をはじめ、母国語以外の言語は話せるということは、もはや普通になってきている。
- ・ 高専の学生にグローバルを意識してもらうためには、少し極端ではあるが、シリコンバレーや深圳のようなITの集積地に見学に行く機会を提供することが望ましいのではないかと考える。

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 英語は小学校4年生から外国語活動として勉強しているが、企業で役に立つような内容ではない。企業で本当に必要であれば、語学を学習内容として位置づける必要があるのではないかと考える。

● 八尾座長

- ・ 語学も重要であるが、海外そのものを体験することも非常に重要である。その意味で、短期・長期留学のようなものに、高専の時間の中で取り組むことができるように工夫することが望ましい。高専は大学入試がない分、時間的余裕がある。海外との交流は積極的に進めていくべきである。
- ・ 語学の問題やグローバル化は日本全体の問題である。若い人がそういうものを日常的に

取り入れていけるよう、頑張ってもらいたい。

(周知方法について)

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 来年は高専が設立されて60周年の記念すべき年である。我々も関連した取材を精力的に行う予定であるが、NHKなどの他のメディアも同様であると考えている。2023年に神山高専が開校する予定もあり、今後何らかの形でメディア露出が増えることが想定される。そういう流れに乗じて、特にNHKなどを活用してうまくPRをするべきであり、いいきっかけであると考えている。
- ・ 詳細は確認する必要があるが、奈良や和歌山高専では、優秀な女子受験者を「優先して選抜」する仕組みも導入しており、女子学生に入学してもらうためには、そうした取り組みを行うことも一案であると考えている。

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 中学生を対象として周知を行うのであれば、インスタグラムの活用が最も効果的である。高専に学生が5学年揃う頃には、学生から中学生に向けて、学校の施設・設備や授業の様子や特徴などを発信してもらえればよい。
- ・ 私立高校ではすでに中学3年生の取り合いが起きている。中学3年生だけでなく、中学1年生に対しても、夏季休業中などに校舎見学会や授業の体験といったイベントの開催についてアナウンスされているところもあり、保護者と一緒に出かける生徒もいる。学校の中の組織として、宣伝を行うための部署が必要ではないかと考える。

● 三東工業社 尾本様

- ・ 女子学生にとって、寮生活は敷居が高い、少し不安があると感じる人もいないか。不安な面を取り除くために、何らかの情報を発信するなどしないといけないのではないかと感じる。

● 日本経済新聞社 田中様

- ・ 仙台高専では、10年ほど前から女子学生の寮生活を改善するための取り組みを学校全体で行っているが、取り組みの効果から女子学生が増えたということであった。また、福井高専・鹿児島高専では、女子学生が小中学校に出向いて実験教室を行うような取り組みも行われている。国立高専は女子学生のための改善などの取り組みについて、相当に色々なことを行われているので、参考にできることも多いのではないかと考える。

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 寮生活に関しては、性差があるとはあまり感じていない。

- ・ 普段の中学生の様子を見ていると、数学や理科が得意な女子中学生は、どの時点で変化するのかということが気になる。例えば、中学3年生の数学でやる軌跡の証明問題でも、みんなが苦手というわけではない。数学が生活や企業のどのようなところで使われているのかということが分かると、興味を持つような素直な中学生はたくさんいるので、そういった学習が必要であると感じる。高専の学生が中学校に来て、中学生に具体的な話をしてくれると、非常に興味が湧くのではないかと考える。

● 八尾座長

- ・ 女子学生の入学については、学生だけでなく先生の問題もある。よって、女性の先生を増やす取り組みを行ったことがある。公募で女性の先生を採用し、中学校で高専を紹介する場面では、必ずその先生に同行してもらい、女子学生と話してもらう機会を設けるなどした。
- ・ 女性の先生を積極的に管理職に登用し、学校経営に参加してもらう取り組みも行った。全国で最初に女性に教務主事になっていただき、非常に活躍していただいている。入学式や卒業式の際に女性の先生がひな壇に並んでいる様子を、写真を介して中学生が見ると、女子学生には大きなインセンティブになるのではないかと考える。非常に有能な先生方がたくさんおられるので、大いに活躍していただきたいという思いがある。

● ナカサク 中作様

- ・ 女性の志望者を増やすためには、認知度も重要である。高専の認知度自体が高くない中、女性ということでもさらに選択肢となりづらい状況があるのではないかと考える。今の若い女の子の中には、ゲームをしている子も多く、eスポーツやサバイバルゲームなど、滋賀県の土地などを活かしてみんなで楽しむ機会を作るとよいのではないかと考える。こうした機会に高専が積極的に関与すれば、認知をしてもらえて、高専を志望するきっかけになるのではないかと考える。
- ・ 入学してからのフォローも重要である。数学が苦手な理解が進まないなど、難しい点が出てくるので、学校側でフォローできる体制を整えることが望ましい。

● 村田製作所 小杉様

- ・ 小・中学生と親に対するアピールが重要である。中でも、小学生が効果的であると考えられる。村田製作所では、約20年前から、小学生の理科離れ防止を目的にして、小学校で理科教室の出前授業を行っている。東京支社では夏休みに小学生向けの1日工作教室を行っている。関東における会社知名度は高くないが、小学生向けの理科雑誌に参加者募集を掲載すると、毎年30名くらいの方が参加していただいている。高専の学生や先生が、そうした地道な活動に取り組むことで、将来的には滋賀高専のファンが増えるものと考えられる。

● さくらインターネット 油井様

- ・ 個人的には、集客においては、学生が憧れを抱くことができるようなロールモデルをどれだけ誕生させることができるかということと、現時点のロールモデルであろう人がどれくらい学生に語りかけるかという点が重要であると考えます。そうすると開校前は正直なところ難しい。
- ・ 滋賀高専ができることに対して信じている、心から共感してくださる方からコメントをもらえるとよいと考えます。コメントをいただく方は、神山高専の事例を踏まえ、熱量や濃度の高い方の方がより望ましいと考えます。滋賀出身・高専出身もしくは、滋賀高専から生まれてほしい人物像に当てはまる人を運営側がしっかりとリストアップして、その方々と話をする。その結果、資金を提供してもらえるかどうかは関係なく、共感してもらえるかどうか。共感してもらえる人の中で、開校後、定期的に学校にゲストとして来てもらえる人が出てくれば、あとはその人自身が、滋賀高専のビジョンやミッション、取り組みの状況を伝えながら、熱量の高い学生にPRを行ってくれるようになると思う。マーケティングや広報・宣伝のテクニックはあるものの、滋賀高専からどういう人が誕生してほしいかという意味で、ロールモデルとなる人を見繕って、その人から発信してもらえるとよいと考えます。

● 皇子山中学校 脇様

- ・ 中学校には技術・家庭科の技術分野の教員がいる。高専の認知度が低いという話をしたが、技術の教員は直結した学習内容を担当していることから、こうした教員を対象として高専の魅力を伝える機会をいただけるとありがたい。滋賀県では、中学校教育研究会に技術家庭部会があり、そういった教育団体とも連携して高専の魅力を伝える機会を創出できるとよいと考えます。

● 八尾座長挨拶

- ・ 滋賀県において、滋賀高専の構想骨子を、詳細に具体的にまとめていただいている。そのなかで、委員の方から、学校運営の具体的な課題を中心に、幅広く意見をいただいた。
- ・ 学校の設置場所、施設・設備等について、地域との連携、交通アクセス、環境、安全の確保等、考慮すべき条件について、種々の意見をいただいた。学校の設立・運営コスト、学校の経営についても、具体的な提案を種々頂いた。
- ・ 実務経験のある社会人による学生の教育、あるいは逆に、社会人の高専での学び直し、そのような制度についての提案があった。学生の起業については、学生の中から自発的に出てくるものをしっかりと受け止めることが重要との指摘があった。グローバルな学びについては、実践的な語学教育の重要性が指摘された。また、学生と海外との交流を

支援する環境整備について議論があった。

- ・ 高専と地元企業の連携については、両者が協力する支援組織を設立して進めていくことが、提案された。また、高専と企業との共同研究や高専の装置や施設などの共同利用を進めることにより、お互いの協力関係が深まることが指摘された。
- ・ 地元定着については、滋賀県の特徴を生かして、琵琶湖の環境について教育を行うことが提案された。またそれが、滋賀県の魅力の発信につながることを指摘された。
- ・ 高専の周知については、高専の学生から中学生に伝えるのはどうか、中学3年では遅いから中学1年からではどうか、いや小学生から地道に高専の応援団を育てていくのはどうか、等の議論があった。また、高専の出口として、学生がどのように育っていくのかを提示すべきとの議論もあった。女子学生については、高専を具体的に知ってもらうことが重要との意見があった。
- ・ 懇話会を4回開催したが、回を追うごとに、委員の方々から、高専の重要なところを具体的また建設的に指摘する意見が、数多く発せられ、大変すばらしい懇話会になった。委員の方々に御礼申し上げます。懇話会を支えていただいた滋賀県庁の皆様方、またトーマツの皆様方に御礼申し上げます。

● 主催者挨拶 滋賀県総合企画部長

以上